

応用生態工学会ニュースレター

Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)

No.36

2007年(平成19年)4月19日(木)発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 **【4月15日に移転：住所のみ変更】**

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-7-5 麹町ロイヤルビル405号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: ec-es-manager@ec-esj.com HP: http://www.ec-esj.com/

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者：幹事長 江崎保男, 事務局長 奥村興平)

Contents

1	はじめに.....	1
2	理事会報告.....	1
3	<寄稿>これからの応用生態工学会.....	2
4	<寄稿>10周年後の次のステップに期待して.....	3
5	第3回東北現地WS in 盛岡報告.....	5
6	九州地区事例発表会を終えて.....	6
7	行事の紹介.....	8
8	新刊紹介.....	8
<編集後記：事務局から>.....		8

議事内容

- (1) ICLEE 関連および3学会連携に関する結論
- 1) 事務局の韓国への移転は、協定書の条文にしたがってのものであり、問題ないと考える。
 - 2) ICLEEの目的はLEEの発行であり、編集委員会が中心になって活動すべきものとする。
 - 3) Springerとの交渉等において、小林前事務局長の存在が重要であるとする、中村編集委員長と小林前事務局長が緊密な連絡をとって、LEEを確実に発行していくのが最も効果的なやり方と考える。
 - 4) ICLEE日本事務局の新設案は、組織を肥大化させるので必要ないとする。
 - 5) 国内3学会の連携の具体案としての、大会の合同開催には賛成である。この件は、国内3学会の幹事長間で詳細をつめていくのが良いと考える。
- (2) その他
- 1) 情報サービス委員会活動状況として以下の4点を報告した。
 - ・竹門理事に担当役員、知花氏(東大：若手の会)と島崎前事務局長((株)いであ)に委員を要請し承認を得たこと。
 - ・当面の活動として各委員が所属する学会等の情報を収集し委員長に集約すること。
 - ・緑化工学会および景観生態学会との連携強化を検討していること。
 - ・前事務局長作成の当学会ホームページ運営(案)をもとに次回理事会に向けて起案書を作成すること。
 - 2) 事務局の移転先は現事務局の四ツ谷より約50mの『麹町ロイヤルマンション405号室』にほぼ確定し、4月15日(日)引越し予定であることを報告した。
 - 3) 賛助会員として(株)沖縄環境保全研究所が2007年度から入会予定であること、(株)電業社機械製作所が2007年度から退会することを報告した。[46社、68口となる予定]

1 はじめに

- ・事務局が移転しました。(ホームページ参照)
- ・景観・生態工学国際学会連合(ICLEE)に関する臨時理事会が開催され、国内3学会の連携も含めて当学会の考え方が確認されました。
- ・前会長と初代事務局長に応用生態工学会のこれまでの10年を踏まえて今後の展望について執筆戴きました。
- ・多様化する応用生態工学の課題に積極的に取り組む地域活動として、盛岡ワークショップと九州地区事例発表会の様子を報告戴きました。
- ・9月15-17日の第11回名古屋大会の公開シンポジウムに「生命の水」の原著者サンドラポステルさんの招聘がほぼ決定しました。会員の皆様の発表準備も宜しく願いいたします。

2 臨時理事会報告

開催月日：2007年3月8日(木)13:00~15:00

会場：利根川歴史研究会事会議室

出席：山岸会長、谷田副会長、辻本副会長、島谷理事、古川理事、江崎幹事長、中村交流委員長

欠席：近藤副会長、荒井理事、大村理事、沖野理事、鹿野理事、角野理事、竹村理事、竹門理事、春田理事、森下理事、森理事、福岡理事

事務局：奥村(記録)

4) 辻本副会長から、9月15-17日に名古屋大学で開催する第11回大会での記念シンポジウムには、(仮題)「生命の水を人と生物はいかに分かちあうか?」というテーマでアメリカの水資源問題研究者サンドラ・ポステル氏を招聘する方向で進めているとの報告があった。

3 <寄稿> これからの応用生態工学

応用生態工学会前会長 廣瀬利雄

(1) 応用生態工学会10年の展望

学会創設初期(研究会)は、10周年記念大会で川那部初代会長が講演されたように、生物系と土木系の間に緊張感、そしてある意味での違和感があった。生物系と土木系では、研究態度に基本的相違点があるわけで、私は当然のことと受け止めていた。つまり、生物系というより理学系は真理の追求を、土木系というより工学系では真理の追求でなく応用性を念頭におく分野であるので、価値観は自ずと基本的に相違しているからである。

ついては発足当初、相互に理解することが難しかった点は価値観と研究態度であった。価値観には夫々の専門分野において判断、評価される価値観と、他の分野の価値観をも含む広い視点から総合的に判断、評価されるべき、つまり社会を形成してゆく上から判断、評価される価値観とがあることが理解され難かった。2つの価値観は、上位、下位、優位、劣位というのではなく、夫々の分野における基本的な価値観であるのに、広く総合的という即、上位、下位に短絡され易かったようである。

また、研究、観察を、仮説を置いて行うということが理解されづらかった。理学系では、真理の追求のためには現象を出来るだけ幅広くみるべきであるという意識があるため、仮説をおくということは観察をある意味では限定することになるので理解しづらかったのではないかと思っていた。

一方土木系については、手入れを実施しながら観察し、その結果をみながら手入れを修正してゆくということ、つまり所謂順応的管理が理解しづらかった。工学系は、実用性があるかどうかを価値判断基準としているので、同一行為は必ず同一結果をもたらすことが約束されていなければならない。更に言えば、自然は自然法則という固有の法則に基づいて構成されているので、法則にのっ

とった初期行為を与えてやれば求める結果が得られるものと日常的に訓練されているからである。つまり、因果関係が明確な事象のみを取扱っているのである。

以上述べた相互の相違点も学会10周年を経て相互理解が次第に進んだように思われる。ついては、かかる現状を踏まえて、将来展望をすべき時期にきていると思われる。

(2) 応用生態工学の将来展望

学会(研究会)創立直前、尊敬する先生から応用生態工学は、生物系と土木系の単なる境界領域を取扱うことを目標とするのではなく、応用生態工学として独立した学問分野を目標として努力しなさいと言われた。

応用生態工学の構想には、

- 1) 応用生態工学として取扱う領域が明確であり
- 2) 手法に独自性がある

つまり、学際領域を取扱う学会ではなく、独立的学会を目指すべきだと激励された。

取扱う領域を、人為的インパクトを受けた場合、対象期間は生物の1世代から高々3世代までとし、手法は仮説をおき、専門分野を異にする複数の専門家が必ず一緒に現場を観察し、検討し、研究することとした点を挙げられていた。

既存学問分野から脱皮し、新しい学問分野を築き上げる手法を私なりに整理してみた。

<1> 基本的態度

第1に、現場で考えることと、現場から考えることに相異があることを理解し、認識することである。現場で考えることは、自分のよって立っている専門分野の眼で現場を見、検討し、研究する態度である。現場から考えるとは、自分のよって立っている専門分野の眼から離れ、第2で述べる問題、目的意識をもって現場で何が起こり、何が関係しているかを観察し、検討し、研究する態度である。

第2に、研究・調査をはじめに当たって、いかなる目的の研究・調査か考えてみるのが大切である。応用生態工学は、応用と銘打っているように現場で解決を求められている問題点に対応する学問分野である。この点からみて会誌並びに研究発表における課題の選択並びに発表の仕方に留意していただくことを願っている。

<2> 注目課題の抽出と展望

応用を目標としている応用生態工学は、実際に

現場で直面し、解決策を求めんと苦闘している事例の蒐集と整理こそが重要である。しかし、苦闘している叫び声を開陳するのはある種の勇気と決断が必要である。現に苦闘している事例並びに問題点はある意味では当事者の財産でもあるので公表することを決意することに躊躇するのは当然である。しかし、社会的に有益なことと思ひ決断してほしい。

一方、事例並びに問題点を折角公表してくれるわけであるから、温かく受け入れ、広く周知させることが必要である。私は広く知らしめる機関として学会誌がその任を負うべきであると考えている。完成、完結された研究成果のみが意義あるのではなく、苦闘している事例並びに問題点の中にすばらしい宝石が潜んでいることは過去の文明の発展が突然変異的に思わぬ展開をしている事実からも明らかである。学会誌の中に事例を取り上げる頁数を増やすのも一方法である。

応用生態工学会が重視すべきは、現実の問題解決を迫られている事例にあると認識し、応用生態工学会福岡が事例研究を採り上げた「九州地区事例発表会」を開催されたことは大変有意義であり敬意を表していることである。

〈3〉データ蒐集の態度

一般には、データはできるだけ広く蒐集するのがよいとする考え方がある。できるだけ広く、多く、データを採っておくと、将来多くのことに幅広く利用しようとの考え方である。しかし、無暗にデータを多く採っても、結果的には役立たない場合が多いことが経験的に知られている。

よいデータとは、よく現場を観察し、その上で問題目的意識に基づく仮説を先ず立て、その上で必要な観察をした結果を取り纏め、仮説と対比させ、必要あれば仮説を修正し、また最初から新しい仮説に応じて必要な観察をした結果を取り纏めたものである。

経済界の世界でも同様であると言われている。経済の世界は社会現象であるので、経済現象に拘わる客観現象は時々刻々変わり、同じ経済現象が反復して現れることは全くといってよい程ない。しかし、反復性のない実験理論は意味がないので、経済理論(仮説)を設定し、反復性のあるように経済現象を抽出、整理するのだといわれている。

〈4〉実際の活動

仮説に基づく手入れを行い、その経過をみて仮

説を再検討し、必要に応じて仮説を組換え、それに応じて手入れも変えてゆくという順応的管理の態度が重要である。兎に角、実行してみることである。

生態に関する調査・研究は、事の性質上長期間に亘る。実際行為が長期に亘るため、極論すれば当初価値判断の基準としていた社会的価値観が変わる場合さえあり、必然的に仮説の組換えをせねばならないことも起こりうる。

土木系の担当者も、この点を次第に理解するようになり、現場で地道な調査・研究が行われつつあるのは喜ばしい。更に多くの人が参加し、活動を盛上げることが期待している。

〈5〉おわりに

以上、事務局の勧誘に応じ、思いつくままに筆をとった。暴論的な個所もあることは承知の上で、率直な思いを記した。ご批判いただければ幸いです。

4 〈寄稿〉 10周年後の次のステップに期待して

元事務局長・現副幹事長 熊野可文

昨年秋の「応用生態工学会 10周年記念東京大会」を迎えて、発足当初から参加させていただいた私にとって、やはり感慨深いものでした。そして、そのときいろいろ考える機会がありました。このニュースレターに投稿させていただき、これからの応用生態工学会に期待したいこと、一寸した提案をしてみたいと思いました。

私は民間の建設コンサルタントに所属し、河川工学を中心にいろいろな業務に係ることができました。学術的なことではなく実務中心の仕事です。昨年3月末をもって34年間在籍した会社を退職し、今個人で活動を始めています。これからも同様の仕事を続けて行きたいと考えております。ですから、『学会活動』などに関わったことは自分でも不思議に思っています。しかし、10年間応用生態工学会に関わってみると、われわれのような民間コンサルタント及び発注者である(河川)管理者、さらには地元で生活の場として日常的に触れている住民の方々など現場に直接関わっている者が、期待し参加しやすい学会であってこそ、その学会が“本物”であると思うようになっております。

もともと応用生態工学を造り上げているときに、

“現場を中心に考える”ことが基本でした。現場を知り、現場から考えることが必要です。そして、行動することです。“こうすれば、こうなる”という根拠を持った理論回答を得てから考えている、自然を相手にしているときはなかなか行動に移れません。求める姿に対してどのようにすればよいのか、いろいろな事例を見て、各々の専門分野の情報を得て、関係者の意見を聞いて、今最も確実性が見出せる方法を捻り出し、まずは行動に移ることです。行動した上で検証し、修正を加えます。でなければ、物事は進みません。これが、廣瀬利夫前会長が提唱してきた「仮説—検証」の基本的な考えであると思います。

したがって、応用生態工学会に期待することは、

- (1) 河川土木と自然環境に係るいろいろな現場の事例情報を得ること
- (2) 動植物や自然環境に関する専門知識を得ること
- (3) いろいろな分野や、いろいろな地域やいろいろな方々との交流を図ること

であり、そのための場や機会があれば参加したいのです。

応用生態工学会では発足以来、会誌「応用生態工学」、ニュースレター、ホームページ、各種シンポジウム、講習会、現地見学会、海外学会派遣、大会開催・研究発表など様々活動が展開されてきました。さて、これから何に参加しようかと考えてみると、大会や学会の運営には関わってきたのですがそれは学会活動の表層であって、自分の技術なり経験を具体的に展開できる場は、となると悩みます。会誌に論文を、とは言うけれど正直とても、とても、となって一度も書いていません。現在の会誌を批判する気はさらさら無いのですが、もう少し参加しやすい場は出来ないものか、と考えてしまいます。

住民（市民）、管理者（公共機関技術者）、民間技術者（建設コンサルタント等）の得意とする参加方法はないか。今、具体的に提案する機会ではないかと思えます。

応用生態工学会では、札幌から福岡まで各地域の実行委員会としての「応用生態工学会〇〇」が成立しております。ところが、関東・東京には事務局があることもありますが、まだ出来ませんでした。昨年秋の10周年記念東京大会を契機として「応用生態工学会東京」を立ち上げることに

しました。そこでいろいろ議論、「さて、何をやるか」。

発足当初、東京周辺では、鷺谷普及委員長を中心として基礎講座や、現地見学会などいろいろな活動を展開できました。また、廣瀬さんの指導のもと、発足前から「応用生態工学序説—生態学と土木工学の融合を目指して—」の編集発行に多くのコンサルタントの民間技術者が参加して侃々諤々の議論を重ねていました。こうした熱意や参加意欲はまだまだ皆持ち続けていることが分かりました。そして、最近入会してきている“若い”方々も参加する場を求めています。我々は現場の事例情報を知り仕事に役立てたいし、自分が関わっている現場については、いろいろな情報を提供することは得意とすることです。

そこで提案ですが、

『現場の事例を中心とした報告を出して行こう』ということです。例えば、

- ① 生物の同一種を対象とした(例えばホタルの復元)で各地の現場事例
- ② コンクリート三面張り河川の自然復元の各地の現場事例
- ③ 郷土種再生のための取り組み現場事例
- ④ 地域地区での総合的な自然環境再生、維持の現場事例
- ⑤ 住民の主体的参加による計画立案、整備、管理・活用している現場事例
- ⑥ 調査をする場合、やみくもに全項目をするのではなく、目的を明確にして実用的に使える要素を抽出できる方法、等々

です。個別の現場事例でもよいし、上記のように課題を決めて各地域の現場事例を集めるのもよいと思います。

また、10年前には特徴的であったり、初めての取り組みであったり、話題になった事例が多くありました。ところが、そうした事例は現在どうなったのか、当初の目標は達成されたのか、10年間の経験を活かせないのか。考えてみる必要があると思います。

現場事例とともに基礎知識や、参加できそうな現場活動情報、参考となる出版物・論文情報なども知りたいことです。

この現場事例報告を積重ねてデータベース化して行く、整理して出版も考える。このためには、

- ① 年間2~4号分の“雑誌的”なものを編集

発行する。

- ② 発行して行く為の編集体制を作る。
- ③ 多くの会員が求める特集テーマを列挙し整理してみる。
- ④ 雑誌とするなら、他の学会や関係機関などで同じような雑誌が数多く出されていることから、今年秋の第11回大会(名古屋)までにまずは1号～2号の試作品を編集してみる。

会員の皆様に参加を求めます。“雑誌的”なものに掲載したい課題・テーマ、編集体制への参加等、是非応用生態工学会事務局までご連絡下さい。

5 第3回東北現地WS in盛岡報告

応用生態工学仙台 橋本正志

11月10日～11日に、第3回東北現地ワークショップとして「東北地域における生物多様性の保全と生物資源の持続的な利用を目指して」を岩手大学(盛岡市)の工学部一祐会館で開催しました。開催にあたっては、国土交通省東北地方整備局、農林水産省東北農政局、環境省東北地方環境事務所、岩手県、宮城県環境アセスメント協会の後援をいただきました。

今回は、河川、ダム、鉄道、圃場整備などの公共事業における生態系保全の調査、研究の取組およびその課題などを、応用生態工学的な事例・成果を通じて、その方向性を探ることが目的でした。

ワークショップでは130名の参加があり、開会にあたっては国土交通省東北地方整備局の山田篤司企画部長より来賓挨拶をいただきました。

基調講演では、岩手県立大学教授の由井正敏先生より「猛禽類からみた生態系の保全対策について」として、イヌワシを例にハビタット評価の研究成果や、公共事業等での猛禽類対策として、やむを得ない場合に用いられるコンディショニングの考え方について説明がありました。

東北環境事務所の田村龍太郎野生生物課長からは、話題提供として、宮城県伊豆沼におけるブラックバス駆除マニュアルの紹介がありました。

また、事例発表として以下の5例の発表が行われた。

- 1) 胆沢ダム事業における環境保全の取り組み事例(国土交通省胆沢ダム工事事務所・村上昌宏)
- 2) クマタカに対する保全対策の一例について(国土

交通省津軽ダム工事事務所・海野仁)

- 3) 雪谷川における多自然型川づくりの事例(岩手県県土整備部・馬場聡)
 - 4) いさわ南部地区における環境配慮について(農林水産省いさわ南部農地整備事業所・古屋幸一)
 - 5) 八甲田トンネルにおけるクマタカ営巣保全の取り組み(鉄道・運輸機構東北新幹線建設局・木村裕俊)
- いずれも事業特性に応じた具体的な保全対策事例についての発表であり、各種の制約の中で工夫された過程もあわせて紹介され、大変参考となりました。

事例発表後に、以下の先生方で「生物多様性の保全・再生の技術・手法とその評価」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

座長 海田輝之(岩手大学教授)

パネリスト 由井正敏(岩手県立大学教授)

竹原明秀(岩手大学教授)

東 信行(弘前大学助教授)

関山房兵(猛禽類保生態研究所所長)

パネルディスカッションでは、まず事例報告に対するコメントを頂いた後に、猛禽類の保護、植生復元、河川生態系の保全など各専門の立場から、事例紹介も含めて環境保全技術の現状や調査手法の課題等について活発な議論が交わされました。



海田座長(左端)とパネリストの先生方

翌日の現地見学会は、あいにくの雨模様ではありましたが33名が参加し、前日のワークショップで報告のあった胆沢ダムでの代償措置として整備された馬留湿地周辺(対象区と代替地)の状況と、モニタリング結果について説明がありました。表流水や地下水位の変動の影響で植生遷移がみられ、今後の維持管理を検討中とのことでした。

また、いさわ南部農地整備事業では、環境に配慮した農業排水路として魚巣ブロック、魚道タイプの落差工などを見学し、魚類のモニタリング結

果についてお話を聞くことができました。圃場整備事業としては先駆的な試みであり、これまでのモニタリング結果を蓄積して、今後の施設づくりに生かしたい、とのことでした。



現地見学会の参加者（胆沢ダム学習館前にて）

今回のワークショップの開催では、東北在住の会員の方々と宮城県環境アセスメント協会の会員の方々に多大なご協力をいただき、盛会のうちに終了することができました。ここに厚く御礼申し上げます。

6 九州地区事例発表会を終えて

実行委員 原田圭助(西日本技術開発(株))
九州地区では、過去に基礎講座、シンポジウム、現地見学会等のイベントを行ってきましたが、平成18年度は初めての試みとして、「応用生態工学会福岡2006 -九州の応用生態工学の事例と研究-九州地区 事例発表会」と題して、平成18年12月1日に事例発表会を行いましたので、その模様を報告いたします。



小野先生による開会の挨拶

会は九州を代表して小野先生の挨拶に始まり、島谷先生の「九州の応用生態に期待すること」という基調講演に続きました。お二方とも、九州は言うに及ばず、世界で活躍されている先生ですが、九州の楽しさをわかりやすく解説して頂き、九州

の自然環境の素晴らしさを再認識しました。



島谷先生による基調講演

◎ 口頭発表

口頭発表は、全部で9編発表されました。内容は現地における施工例からモデル、計画論まで、非常にバラエティに富んだ中味の濃い発表でした。学生・院生の方の発表も2編ありましたが、座長・進行役を務めて頂いた島谷先生、河口先生、渡辺先生の計らいもあり、学生・院生の方もリラックスして、思うこと・考えていることを十分話せたように感じました。

◎ ポスター発表

ポスター発表は合計15編の発表がありました。このうち5編が汽水域や海域に関する発表でした。九州は有明海・八代海を有しており、海域に関する関心の盛り上がりを感じます。全てのポスター発表のうち、参加者の投票により次の3編の発表にポスター賞として表彰状が授与されましたが、いずれも海域に関する発表であったことも、関心の高さを裏付けたものでした。

- 博多湾における貧酸素水塊の発生と二枚貝の消長に関する研究
[○下山慎一, 下村剛規, 山崎惟義, 渡辺亮一 (福岡大学工学部), 熊谷博史(福岡県保健環境研究所), 藤田健一, 藤井暁彦(財)九州環境管理協会]
 - 発光ダイオードを用いた貧酸素水塊改善技術の開発(基礎実験結果)
[○井芹寧, 堀田剛(西日本技術開発(株))]
 - 御島における環境修復事業について(香椎地区シブルー事業)
[○瓜生敏幸(福岡市港湾局環境対策部環境対策課)]
- (○: 発表者, プログラム掲載順)

なお、ポスター発表の会場がやや狭かったため、発表者並びに参加者の方に大変ご迷惑をおか

けしましたこととお詫びいたします。次回以降は、十分なスペースを確保できるよう準備いたします。



熱気あふれるポスター発表会場

◎ アンケート

アンケートを見てみると、「非常に有意義であった」、「今後も定期的に継続してほしい」という意見が多かったのが特徴でした。学会発表、それも大会という、どうしても敷居が高く、学生の方や現場の技術者は引込み思案になることは否定できません。そういった方々も気軽に発表し、意見を交換できる場にできればと思います。

また九州の事例は、九州の人と九州で考えていくことが大事であるし、意外と事例・研究を地元の人に知っていただく機会は少ないのが現状です。身近にある事例について知る・触れることは、親近感が湧くし、なんとかしないという気持ちにもなります。また、うまくいかなかった事例でも、気軽に発表して頂き、知見を共有していくことで、次の事例に生かせると思います。そういう雰囲気を作っていければと思います。

◎ 様々な主体の参加

今回の会では、大学、民間企業、国土交通省、環境省、福岡市、北九州市という、様々な所属の方から発表していただきました。学生や自治体の方などは、遠方で開催される大会には出席できないという方が多く、そういった方にも発表と意見交換の機会を提供できる場になりうると確信できました。九州地区では、所属や立場の違いを越えて、同じ場で議論して、より良いものを作っていく雰囲気ができるよう今後も努力していきたいと考えています。

◎ 今後の課題

会の最後に講評を頂いた荒井先生からも指摘がありました。水域及び水際に関する研究が多いことは事実です。それだけ、河川が様々なランド

スケープの中心であることは間違いないのでしょうか、山地あるいは都市などの研究も今後出てくることを期待しています。事務局としては、参加・発表して頂ける行政・大学の方の分野を広げていく努力を続けていくことも必要かと考えています。

◎ おわりに

学会のレベル向上のため、大会を開催することの意義について疑う余地はありません。しかしながら、応用生態工学会は多くの現場の技術者によって支えられている学会であることも事実です。彼らにとって、大会で学ぶことも重要ですが、もっと気軽に自分の事例を発表し、意見を交換することにより、ビジネスを越えた価値観を共有できるはずだと思います。そうすることは、時間がかかることかもしれませんが、学会の活性化にもつながることと期待しています。

最後に、今回の会はメーリングリスト、ホームページ掲載による参加者募集であったため、発表プログラムを紹介して、会の感想といたします。

*****発表プログラム*****

(○：発表者、所属は発表当時のものです)

●**口頭発表 1 (11:10~12:10)**

- 0-1: 裂田水路における植生率の変化が魚類の生息量に与える影響
○兼重俊介, 渡辺亮一 (福岡大学), 島谷幸宏, 河口洋一 (九州大学・院・工), 山崎惟義 (福岡大学)
- 0-2: 人工知能技術を援用したメダカの生息場選好性モデルの再現性の比較
○福田信二 (九州大学熱帯農学研究中心), 平松和昭 (九州大学・院・農)
- 0-3: テン *Martes melampus* の密度推定と餌植物分布から見た環境の評価 -佐賀市富士町嘉瀬川流域から-
○足立高行 (応用生態研), 荒井秋晴 (九歯大・総合教育), 桑原佳子 (応用生態研), 田悟和巳, 中村匡聡 (いであ(株))

●**口頭発表 2 (13:10~14:10)**

- 0-4: 北川河口域におけるハマガニ *Chasmagnathus convexus* の生息環境と保全
○酒井奈美 (西日本技術開発(株)), 小野勇一 (北九州市立いのちのたび博物館)
- 0-5: 清水バイパスによるダム下流の環境改善効果の検証 -巖木ダムと伊岐佐ダムの比較-
○河口洋一, 池本亮二 (九州大学・院・工), 片野泉, 皆川朋子 ((独)土木研究所自然共生研究センター), 田代喬 (名古屋大学・院・工), 萱場祐一 ((独)土木研究所自然共生研究センター), 島谷幸宏 (九州大学・院・工)
- 0-6: 筑後川上流域におけるダム放流量変化が付着藻類に与える影響
○斉藤正徳 (九州大学・院・工), 井芹寧 (西日本技術開発(株)), 河口洋一, 矢野真一郎, 島谷幸宏 (九州大学・院・工)

●**口頭発表 3 (15:30~16:30)**

- 0-7: エコ・ユニット工法 (生態系移植工法) と施行効果判定 I -植物編-
○桑原佳子, 足立高行 (応用生態研), 中西茂樹 (エコユニット協会)
- 0-8: 紫川における自然環境に配慮した川づくり

- 澤田尚人, 平田裕, 内村政彦 (北九州市)
- 0-9: アザメの瀬自然再生事業について
- 泊耕一 (国土交通省九州地方整備局武雄河川事務所)

ポスター発表 (14:10~15:30)

- P-1: 博多湾における貧酸素水塊の発生と二枚貝の消長に関する研究
- 下山慎一, 下村剛規, 山崎惟義, 渡辺亮一 (福岡大学工学部), 熊谷博史 (福岡県保健環境研究所), 藤田健一, 藤井暁彦 (財)九州環境管理協会)
- P-2: ダム湖周辺裸地における自然復元の一事例
- 原田圭助 (西日本技術開発 (株)), 袴着正隆, 大内周, 秋花芳一, 川原慎平 (九州電力 (株)), 木野史郎 (九州林産 (株))
- P-3: 自然林復元工法
- 間地 景一郎 (豊樹園)
- P-4: ダム事業に伴う湿地環境の復元
- 宮島泰志 (株) 建設技術研究所)
- P-5: 住民参加による生態系保全を目的とした小型魚道の開発
- 大平裕, 柴田幸次 (財)九州環境管理協会), 中野芳輔, 弓削こずえ (九州大学)
- P-6: 阿蘇草原再生 (揭示のみ)
- 環境省九州地方環境事務所
- P-7: 発光ダイオードを用いた貧酸素水塊改善技術の開発 (基礎実験結果)
- 井芹寧, 堀田剛 (西日本技術開発 (株))
- P-8: ダム貯水池における密度成層を活用した水質保全対策
- 井芹寧 (西日本技術開発 (株)), 井上徹教 (港湾空港技術研究所), 小松利光 (九州大学・院・工)
- P-9: 水際における魚類の生態系維持に関する研究 - 北川感潮ワンドに見られる魚類生態系を通して -
- 中谷祐也, 江口勝久, 鬼倉徳雄, 西田高志, 乾隆帝, 中島淳, 及川信 (九州大学・院・農)
- P-10: 有明海沿岸域のクリークにおける護岸形状と淡水魚類の出現状況
- 杉本芳子, 鬼倉徳雄, 中島淳, 江口勝久, 西田高志, 乾隆帝, 剣持剛, 兼頭淳, 中谷祐也, 及川信 (九州大学・院・農)
- P-11: 博多湾流入河川の純淡水魚類相
- 兼頭淳, 鬼倉徳雄, 中島淳, 田中岳人, 中谷祐也 (九州大学・院・農)
- P-12: 御島における環境修復事業について (香椎地区シーブルー事業)
- 瓜生敏幸 (福岡市港湾局環境対策部環境対策課)
- P-13: 景観模型を用いた杵尾海岸の海岸線保全に向けた取り組み
- 片山明俊 (九州大学・工), 島谷幸宏 (九州大学・院・工)
- P-14: 魚類の生息環境から見た多自然川づくりの評価と改善策の提案
- 久岡夏樹 (九州大学・工), 福迫貴博 (株) 大進, 河口洋一 (九州大学・院・工), 澤田尚人 (北九州市建設局下水道河川部), 朴埼燦, 島谷幸宏 (九州大学・院・工学研究院)

6 これからの行事案内

- (1) 応用生態工学会第 11 回大会参加呼びかけ
- 月日: 9月15-17日 場所: 名古屋大学
- 1) 研究発表に今から準備を!
- 研究発表募集開始: 6月初旬

- 研究発表募集締切: 7月中旬
- 講演要旨提出締切: 8月中旬

2) 各地域からの活動報告を!

- 研究発表は例年通り口頭発表またはポスター発表での募集予定ですが、とくに、各地域からの臨場感と活気あふれる活動報告を期待しています。

3) 実行委員会に参加を!

- 特に、名古屋地域の方々の参加を求めます

(2) 第 6 回北陸現地 W S in 新潟

月日: 10月19-20日 (金-土)

場所: 未定

7 新刊紹介

『農村の生きものを大切にする 水田生態工学入門』水谷正一編著 (社) 農山漁村文化協会

定価 2,900 円 ISBN978-4-540-06122-6

多くの生きものの生息や繁殖の場をも形成していた農の営みが、近代化の過程でその機能を見過ぎてきた結果、これら農村の水域環境に暮らしていた生きものは、壊滅の危機に瀕しています。著者らは長年、“農村の自然環境と農の営みの共存”という本来の姿を取り戻そうと、研究、調査を重ねてきました。本書はその集大成であり、水田とそのまわりの水域と陸域からなる農村生態系の特徴を描きだすとともに、生物多様性を維持・回復する取り組みの現代的意義を示し、生物多様性を維持・回復するための技術、いわゆる環境基盤づくりの新たな技術を提案しています。

また、「ハードの技術」にとどまらず、事業の計画づくりと事業後の管理における事業主体、受益農家、専門家、地域住民、NPO等の役割分担と協力関係など、「ソフトの技術」についても明らかにしています。(「はじめに」より)

<編集後記: 事務局から>

2007年度学会費納入にご協力いただき有難うございました。発行が新年度になってしまい、誠に申し訳ありませんでした。次号は第 11 回大会開催案内、幹事会・理事会報告を主に 6 月中旬発行を予定します。投稿をお待ちいたします。

[2007年4月19日現在会員数]

正・学生会員	1,206名
賛助会員	41法人(65口)